

教員 (2)事例から考える

ここでは、ゲームネット問題についての事例を取り上げて、実践的、具体的に考えていきたいと思えます。この中では、ある高校1年生の男の子が、ゲームネット問題を通してご家族が困惑していて、そこで学校として対応していきながら連携を図り回復していく姿をご紹介させて頂いております。その事例を通して、学校としてどのように動いていくかというところを、ぜひ具体的に、ご紹介できたらと考えております。もう一つの動画でゲームネット依存障害についての動画がありますが、その動画の中でも、事例をとりあげて解説していく形でご紹介しておりますので、そのような意味でも、この事例についてぜひ味わっていただけたらいいかなと思っております。

でははじめて行きたいと思えます。この子は、中学生から高校生に上がると急に勉強についていけなくなり、家に帰ってきてからはオンラインゲームにはまるようになりました。比較的、中学校受験も頑張っており、高校では偏差値の高い高校に入学したという経緯です。でもそこから生活リズムが乱れて部屋から出てこなくなり、それを心配したお父様が、ゲームを取り上げたり、Wi-Fiを切ったりすることもあったのだけれども、怒り出してどう対処していいかわからなくなってしまいました。ほとほとご両親としても、困っている様子です。始めは食事と一緒にしていたのですが、食事中も、スマホを見てばかりで、何かを話しかけたとしても、すごくイライラした様子で、次第には食事と一緒に取らなくなってしまいました。家の中でもちょっと緊張感が出てくる感じで、そのような姿を見て親としては不安が募って、声をかけても、拒絶的、反抗的な態度で、どうしていいのかわからない感じで、その中、朝起きられず、学校も休みがちになって、とうとう、学校に行けなくなって不登校になってしまいました。そんな毎日です。本人が、そんな毎日をどう過ごすかと言うと部屋から出てこず、ずっと部屋の中で、ゲームのようなものをしている。そして、誰かと話しているのか、チャットなのか、ゲームなのか分からないのだけれども、「死ね」とか、「くそ」とか「ふざけんな」と、部屋から暴言等が目立ってきていました。接しても拒絶的反抗的な態度で、どういう風に接していいかもわからないという状況の中で、お母さん、お父さんとしても誰に相談してもいいかわからず、困惑してしまいました。

次行きます。家族関係です。お父さん、お母さん、本人高校1年生と弟くん小学校5年生の4人家族でした。お父さんは会社員、お母さんはパートで短時間勤務です。

経済的な困窮は特にありませんでした。お母さんはしばらくお休みの連絡ということで、担任の先生と連絡は取り合っていて、先生もお話を聞いてくださったり、教材を通して休み中の勉強の心配もしてくださったりするので、信頼はしているというところでした。一方で、お父さんはどちらかと言うと子供の教育には厳しく、中学校受験も本人に頑張らせて、高校受験も本人に厳しく頑張らせて、成績が下がると、子供たちを叱るという様子もあつたりします。お父さんがお母さんも責めること、お前の育て方が悪かったと、責めることも出てきていて、コミュニケーションがうまく取れていない状況でした。子供のことであまり話し合えていなかったり、そういった状況だったので、中学生までは本人は成績が優秀で、中学校はサッカー部にて3年間過ごしていました。中学校では友達も多く、友人関係のトラブルは特にありませんでした。

次行きます。ここでは経過についてお話ししていきたいと思えます。しばらくお母様から欠席の連絡がつづくようになって、そういった状況に対して、担任の先生が、お母様に、しばらく様子を見てみましょうとか、そういったアドバイスもしていたのですが、担任の先生も少し困ってきたので、スクールカウンセラーに簡単に相談してみました。そうするとスクールカウンセラーからの提案として、感情の悪循環の可能性があるので、先生がお一人で抱えない方が良いというアドバイスを受けました。自分としても、感情の悪循環だつて言われてもあまりピンと来ることなくて、心配することが悪いことなのかなとか、お母さんに向けて自分も心配することが、当然教師としては必要なことだし、悪いことしているのかなという気持ちにもなんとなく受けながらですね、スクールカウンセラーからのアドバイスを受けて、抱え込まずに一緒にスクールカウンセラーも、第三者としてこの保護者に関わってくださることになりました。お母さんも本当に困っていた様子だったので、スクールカウンセラーに相談できること自体も望んでいらつしゃつたので、結果として学校の教育相談室にお母さんが来校していただいて、お話するという流れになっています。スクールカウンセラーさんが保護者との相談を受け持つていく中で、お母さんからとうとういろいろ話が語られるんですが、スクールカウンセラーさんの方では、例えばゲームをするとかゲームをしないとか、ゲームを取り上げる取り上げないとか、時間をどうしたらいいか、そういうことの話題にするのではなくて、本人の生きづらさがどこにあるのかという焦点でお母さんと話しあつていきました。お母様の守秘に関する許可を得て共有してもいいですよというところで、お話しした内容に関しては、教員、スクール

カウンセラーと保護者と共有しながら、本人の理解を進めていきました。スクールカウンセラーさんからは、今日こんなお話がありましたとか、みえてきた話としてはこんな風な彼の理解がありましたというところが、先生の方には逐一上がってくるという感じでした。主にお母さんの話からは最初は、自分の育て方が悪かったとか、罪悪感が語られていきます。なんとなく、そういったお話を聞きながら、担任もうすうす、今まで甘すぎたのではないかなとか、何でゲームをそんなに許していたのかな、みたいな感じでお母さんが甘やかしていたのではないかなという気持ちが、自分の心の中にあること、こうなったのもお母さんが悪いのでは、という思いに対してスクールカウンセラーの方からアドバイスいただきまして、誰、何が問題ではなくて、担任自身がどう思うか、お母さん自身がどう思うか、率直な本人像を語ってもらう。自分を主語にして語ってもらうことを大切にしてくださいとお願いして、情報共有の中では自分は、ぶっちゃけそのお母さんの前では言えないけれど、お母さんが甘やかしていたのではないか、という気持ちは若干あるのですけどね、という気持ちをスクールカウンセラーにも聞いていただいたりしています。担任としては、甘やかしてたのではないのかなという思いもあったりする。でも一方でお母さんがすごく可哀想に見えてきて、お母さんがこれだけ罪悪感持っていて、担任として、何とかしなければいけないという責任を引き受けていたことに気づいて行きました。教師として引き受けすぎていたところが気づけたので、改めて自分の役割は、どこまでなのかをそのカウンセラーさん含めて他の教職員管理職とも共有しながら考えていった流れになります。

今度はですねお母さんの語りから見えてくる本人の課題。実はなぜ本人がとてもゲームネットにはまってしまったのかとか、なぜ今不登校という形になっているのかというところも話し合いながら、だんだんと見えてくるようになりました。勉強についていけないという背景には、どうやら今までお父さんとの間で、勉強をやればお父さんが喜んでくれる、親が喜んでくれて自分自身に生きがいを感じていた。本人にとって勉強がついていけなくなるということは、ものすごく自分にとって不全感が生じてしまうところ、自分自身って何なんだろう、分からなさが生じてしまうというところ。そのようなことに、実は息苦しさを感じていたのではないのかなということが、見えてきました。このように、本人の理解が深まっていく中で、スクールカウンセラーさんから理解のネットワークを広げていくために、スクールソーシャルワーカーの導入の提案を受けました。スクールソーシャルワーカーさんが導入されることによってスクールソーシャルワーカーさんの見立てとか、あるいは家庭を訪問し、訪問した

時の家の様子や、場合によっては訪問した時に家族の面接をし、本人に関わることもできるので、そういった関わりが増えていく、依存先を増やしていく、本人の理解のネットワークを広げていくために、スクールソーシャルワーカーの導入を受けて行きました。その旨を、管理職にも報告し、相談したところ、お母さんの同意も得られたので、スクールソーシャルワーカーの介入を始めて行きました。そのような中でスクールソーシャルワーカーは自宅訪問を実施して、後は家庭での様子も報告してくれる形になっていました。その情報を、担任の先生、スクールカウンセラーさんを含め管理職も含め共有しながら、さらに本人の理解を深めていきます。スクールソーシャルワーカーは、最初は玄関先で会う程度だったのですが、繰り返し参加していくうちに、本人も降りて参加してくださるようになってきて、父と母と子で家族のグループ面接をして、その面接の中で、本人の思いを率直に聞いて、お母さんの思い、お父さんの率直な思いを聞きながら家族内での対応を促して行ったという流れになっております。

次行きます。スクールソーシャルワーカーさんが本人にお会いしたところ、本人が被害的な様子がありました。なんか学校のみんなはどうせ僕のことを嫌っているとか、うまく勉強ができないと周りについていけないとか、周り友達にもなってはいけないとか、だから学校に行くとすごく目線が強くなって苦しくなってしまうというお話も出てきていました。そこで、医療の緊急性、統合失調症の前駆症状の可能性があるかもしれないというところで、スクールソーシャルワーカーは、精神保健福祉センターに連絡して、この状況を伝えて、スクールソーシャルワーカーの見立てを話しして助言をもらったところ、特に緊急性はないという風に判断されたので引き続き、スクールカウンセラーと保護者との相談。スクールソーシャルワーカーとの相談なんてところを継続して、先生もそれぞれの報告を受けて、管理職にも報告した上で、情報共有して行きました。再び教員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと両親も呼んで、支援会議を実施して、さらに本人の理解を深めていくと同時に、あとは学校の対応のあり方、役割も模索して行きました。実際に学校としてどういった事が関われるのかも検討して行きます。生きづらさの背景には、入学当初から学習環境の変化が起こった、ついていけなさというのは、学習環境の変化が本人の中での混乱に繋がっていたところが分かってきました。中学校の頃までは、これしてくださいあれしてくださいというところを、明確に先生の方から指示していて、宿題は多かったのですが、やることははっきりしていた。でも高校になってから、すごく自由度

が上がり任されていて、自分に任されるようになったら、何をどう勉強したらいいかわからなくなってしまったという状況で、混乱におちいついていたところでした。そこから、本人の中で勉強ができないと友達と繋がってはいけないのでは、という気持ちもどんどん強くなっていった、そこから不全感を持って行き、本人の中で生きづらさを感じていたところが見えてきました。そういう環境の変化ですね。実はすごく苦しさを感じていたところから、もしかしたら発達障害なんていうところが垣間見えてきたので、スクールソーシャルワーカーさんからの提案で、本人にとって効率的な勉強方法を考えるため、本人にお話をして医療機関をご紹介して頂きました。この際も、精神保健福祉センターに相談して、若干ゲームネット依存の可能性もあるので、依存症を診られる病院も合わせて紹介してもらいました。医療機関では、本人に受診を促して、この時にゲームネット依存を主訴でいくと、たぶん本人はいかないと思うのですが、本人の生きづらさが語られてきていて、本人も困り始めていたので、本人にとっての治療動機が高まっていき、結果として受診に繋がっていた次第です。そして、心理検査を実施していただいて、その検査結果を本人と詳しくスクールカウンセラーさんが確認し、そこで見えてきたアセスメントをさらに、教員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、両親、本人、あと場合によっては、医師とか病院の心理士と連絡を取り合いながら、確認していくという所で本人を理解する回復のネットワークができて行きました。

次行きます。その後、担任の役割として、初めはどちらかと言うとゲームをする、しないとか、登校する、しないところに焦点を当てていたのですが、そうではなく、彼の生きづらさが見えてきたので、生きづらさというのは、環境の変化であり、そこでの環境が変化によって自分自身のやり方が分からなくなっている、混乱した状況が見えてきましたので、学校ができる点としては、勉強面であったり、教育の側面の合理的配慮であったり、そこら辺について検討するような形です。あるいは進学ための要件を保護者に伝えた上で、進学のためにはあと何日出席が必要とか、あと成績がどれぐらい必要であるという所を明示した上で、保護者に見通しを持ってもらうというところでした。あとは専科の先生に掛け合い、授業で必要な使用教材とかプリントを用意して、家でも自宅学習ができるような配慮していたところ、試験対策や単位の危うい科目に対して具体的な対策方法や、フォローも掲示して行きました。あとは学校でもし本人が登校を希望した場合に、場所を確保するために別室登校、相談室での登校や、あとは登校時間の配慮、あとは部活がすごく好きなので、サッカーからの参加と

いうところも、管理職と相談して、合理的配慮の中の検討事案として、入れていくお話しをして行きました。そこで学校でできることを提供して、学校内でも理解のネットワークを広げていき、学校の先生方の間でも情報交換を行って行きました。

経過ですが、保護者が担任とスクールカウンセラーそして本人が外部機関、医療と繋がって、本人の生きづらさの理解が深まっていきました。そこで学校でできること、保護者としての関わり方を振り返って回復環境が整えられてきました。関わっていく関係者の中で、本人の理解が深まっていくと共に本人も周りから分かってもらえるという感覚が少しずつまわっていき、自分からの生きづらさが段々と語られるようになっていきお父さんやお母さんとの対話も増えていきました。さらに、スクールソーシャルワーカーの訪問にて家庭での対話が、促されていきます。スクールカウンセラーは学校の相談室にて保護者との面談。学校との情報共有を継続して本人の困りごとを家族、学校で共有する事ができて、そのような中で夫婦間の課題の対話がなかなかできていない、あるいはお父さんも自身も自分自身の考え方価値観を率直に語られるようになって、それを家族間でも特に否定することなく、そのような価値観なのかというところ。でもお母さんとしてもこのような思いもあり、本人とお母さんの考え方の対話が、始まって行きました。こういった形で家族全体のあり方が変化し始め、ゲームをすとかゲームをしない時間をいくつにしていこうというところではなくて、今ご本人がどうしていきたいというところに焦点が向いて、そしたら本人の方から学校に通うことの意味や、意義、自分自身勉強する意味は、なんだろう、なんで勉強しなければいけないのだろう、お父さんからずっと求められ続けてきたことに応えていたけれど、生きづらさが出るようになって、その辺について担任の先生とお話をするようになり、対話するようになっていき、本人の中での変化が見え始め、回復にいたった変化が見え始めてきて、家族全体が変わっていたという流れになって行きます。

いかがでしたでしょうか。今回、この事例は、実際にあった事例というよりは複数ある事例をミックスさせた事例なので、創作の事例ではあるのですが、本当によくあるケースというふうに思っております。こういった学校の中でも、多分少なくないというふうに思うんです。ゲームネット依存症とか依存症と言うと、どこかちょっと遠くにあるように思うのですが、この不登校という風に見ていくと、その不登校には大抵ゲームをやりすぎているという事がありますので、そのゲームのやりすぎが病気かどうかというところよりも、彼がどんな風に生きづらさを感じているかという

視点を持つことによって、彼の理解が深まっていき、彼の理解も周りと共有しておくことによって、彼の理解のネットワークができ、そして理解のネットワークができることによって、仮に学校に来ないまでも、彼の居場所がだんだん出来上がってという感じです。そのような中で彼の心の中でも変化がみられていくのだというケースです。